

巻頭言

心に広い裏庭を！ 「市民の声」の質を考える

(株)電通 ブランド・クリエイション・センター

シニアコンサルタント

望月 真理子



しばらく前に参加していた某官庁の委員会で、都市景観政策についての意見を一人三分で述べる場面があった。三分はいかにも短い。が、予定時間以内に委員全員が発言するためにはやむを得ない。腐心しながら考えをまとめていると、中年の女性委員が立ちあがった。タレントというよりワイドショー・コメンテーターとして知られる彼女が、「自宅の前にゴミを投棄する不届き者」と、近所の道路工事の耐え難い騒音」について滔々と十五分間喋り続けた挙句、官庁側の上司に向かって「早急に何とかしてください」と訴えかけるに至っては、一同の目が点になっていた。

このとき隣に座っていた学者が、ああいうのを「NIMBY(ニンビー)」というのだ、と教えてくれた。Not In My Backyardの略だそう。社会問題全般については正論めいた発言をしていたものが、いざ「自宅の裏庭」にかかわる問題、すなわち「私」の領域に抵触する問題となった途端、ヒステリックに個別利益の保護を主張するような態度あるいは人を指すという。八〇年代に生まれたというこの言葉を、最近また思い出す機会が多い。

つい先日の話だ。市役所(山形県内ではない、念のため)に勤める知人から、「ここだけの話」と前置きして聞かされたのは、彼が随行している市長主催のタウンミーティングに関する愚痴だった。

参加希望者が多く、発言も活発なのはいいが、出てくる話題が近隣のドブ板問題の域を出ない。ドブ板問題に興味がないとは言わないうが、市長と市民が市政について語りあう趣旨には一向に近寄りず、市長もいささかうんざりしてしまっている。市全体という視野で考えてほしいと思うのは無理な注文なのだろうか、と。

市民主体の街づくりが叫ばれる今日、市民の声を地域経営に反映するための仕組みの整備が、あちこちで始まっている。

それ自体はまったく間違っていないし、重要なことでもある。しかしそこに厳然と存在するのが、NIMBYの問題だ。地域のあるべき将来像を描き、実現していくために有用な「市民の声」とは、少なくとも裏庭まわりの苦情ではない。すなわち、「市民の声」の質が問われなければならない。

このために必要なことの第一は、「市民の声」を正しく選択することである。広い視野のもと、社会に貢献している人を有識者と呼ぶべきであり、冒頭の女性タレントの場合は、明らかに人選のミスだ。逆に有名人でなくとも、この条件を満たす人々は確実に存在している。耳を傾けるべきは、そうした市井の有識者たちの声なのだ。

第二は、母集団としての市民全体の意識向上を図ることだ。誰しも「私事(わたくしごと)」「には関心があるし」「他人事(ひとごと)」「にはさほど興味がない」「他人事」にも関心を持つべきだ」というような教条主義的啓蒙は、多くの場合功を奏さない。むしろ、「私」「他人」の対立構造とは別次元の視点を提示することが望まれる。

端的に「公益」が、その例だ。「自分自身の幸せから一歩進めて、みんなのために役立つこと」(東北公益文科大学のサイトより)。理屈ではなく、自身の喜びとしてそれが実感されたとき、「公益」は、「私」を超えるモチベーションとなる。その喜びを体験する機会を増やすことが、市民の「公益」的感性の涵養につながる。

「公益」的感性とは、社会で起こっているさまざまな事象を、自分にかかわること、「私事」として捉えることを意味する。自宅の裏庭が地球サイズになったとき、もはやNIMBYは問題でなくなる。

活力ある次代社会を創るのは、矮小な「私」を超えた市民の声であり、行動なのだ。公益学発祥の地・山形から、それが生まれてくることを願ってやまない。